

氏 名	桑 山 由 文
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 136 号
学位授与の日付	平成 11 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 西 洋 史 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	ローマ元首政における政治支配層の変容

(主査)

論文調査委員 教授 南川 高志 教授 谷川 稔 教授 服部 良久

論 文 内 容 の 要 旨

ローマ帝国は最盛期である紀元1～2世紀において、「元首政」と呼ばれる政治体制をとっていた。政治と社会の頂点に元首＝「皇帝」がいて、その指導下で広大な帝国の統治がなされていたのである。しかし、現実の統治は第1の政治支配層たる元老院議員身分と第2の騎士身分の人々が担っていた。とくに元老院議員は共和政時代の初期からローマ社会のエリートであり、国家の重要な公職は、紀元前1世紀末に元首政が始まってからも、この身分に所属する者たちによってほぼ独占されていた。また、皇帝位にも必ずこの身分の者が就いた。これに対し、第2の騎士身分は人数も多く、元老院議員より下位の公職を担当するとともに、皇帝直属の職務に就くことが多かった。このため、共和政の政治的伝統の担い手として元老院議員を捉え、一方騎士身分を皇帝の「走狗」とみなして対置する見解がかつて学界では一般的であった。ローマ帝国では、紀元3世紀の全面的危機の時代に元老院議員に代わって騎士身分の者が帝国統治の要職に就くようになり、3世紀末には共和政の要素を残す「元首政」が崩壊して皇帝権力が絶対化した「専制君主政」が成立したと一般に説かれるが、先の見解に従えば、紀元1～3世紀の皇帝政治、「元首政」の進展は、皇帝による元老院議員身分の抑圧・排除と皇帝直属の騎士身分の興隆、そしてそれに基づく皇帝権力の強大化の過程と理解されるのである。

こうした元首政の展開に関する解釈は、研究の進展によって克服されつつあるが、旧説に代わる政治過程の新しい説明は、政治の表舞台に現れることが多く史料にも恵まれている元老院議員の動向の分析に基づいてなされるのが主流であって、第2身分の騎士身分の果たした意義については、統治権力を手にした紀元3世紀を別にすれば、欧米の学界において構成員に関する基礎データの集積が進んでいるものの、政治史の脈絡で十分な考察がなされているとはいえない。わが国でも、先行研究としては、主として紀元3世紀の騎士身分を扱った論文を数点数えるのみである。本論文は、このような学界の状況を踏まえ、紀元1～2世紀と3世紀の初頭の騎士身分に重大な関心を払いつつ、最盛期ローマ帝国の政治を、それを担った政治支配層の実態や変質を解明しながら明らかにしようとした研究である。

本論文は、研究課題を提示した「序説」に続く第1部「元首政における騎士身分の上昇——近衛長官職の場合」において、騎士身分の発展の典型的な例として、騎士身分公職体系の頂点に位置した「近衛長官」を論じる。近衛長官は皇帝の警護部隊の長であるが、やがて警護に限らず内政・外交に大きな権力を有するようになり、紀元3世紀には「副皇帝」のごとき存在となって、皇帝位に就く者まで出現した。従来の研究は、紀元3世紀初頭のセウエルス朝諸皇帝のもとで、ローマ法学者として著名な人物が近衛長官として活躍したために、この時期に近衛長官の内政面での権限発達が認められると主張した。しかし、論者は第1部第1章で、当該時期に近衛長官となった人物とその権力形態の精査をもとにして、こうした見解が妥当でないことを証明した。さらに第1部第2～4章では、時代を遡って史料の分析と先行研究の吟味をおこない、近衛長官が軍事と内政の両面において恒常的に権限を行使し国政の運営に携わるようになった時期を確定しようと試みた。その結果、騎士身分筆頭の近衛長官職の権限が確立したのは、皇帝と元老院議員との関係が良好で政治が安定していたことで知られる紀元2世紀中葉の五賢帝時代後期であったことを、権限確立の背景とともに明らかにしたのである。これにより論者は、騎

士身分公職の発展が、元老院議員身分主導の政治体制と対立したものではなく、それを補完するものであったと結論している。

本論文の第2部は「元首政におけるフラウィウス朝の意義」と題し、第1部と異なって騎士身分そのものを検討するのではなく、近衛長官職の権限が確立した時期よりさらに前のフラウィウス朝諸皇帝の時代（紀元69～96年）を対象として、元老院議員身分への人材供給源としての騎士身分に注目する。紀元1世紀以降のローマ社会では、元老院議員家系の断絶などが生じ、元老院の定数を満たすため、皇帝による次位の騎士身分からの昇格がおこなわれた。論者は、第2部の諸章において、騎士身分家系出身の元老院議員や、騎士身分から元老院議員身分に中途編入された者（アドレクティ）の実態、彼らと皇帝との関係に注意しながら、当該時代の政治動向を分析した。そもそも皇帝ネロ死後の内乱を勝ち抜いて帝位に就きフラウィウス朝を開いたウェスパシアヌス帝（在位69～79年）は、自らがイタリア地方都市の騎士身分家系出身の新人元老院議員であった。皇帝ネロまでのユリウス＝クラウディウス朝の諸皇帝は古くからのローマ貴族家系に属し、ネロ死後の内乱時に乱立した諸皇帝も伝統ある元老院議員家系の出身であったから、騎士身分家系出身のウェスパシアヌスの登位は、元首政史上きわめて意義深い出来事であった。第2部第1～3章で論者は、こうした皇帝の出自に注目して、内乱時におけるその支持基盤と政権獲得後の権力安定化の過程を分析する。そして、帝国東部を基盤としたことがウェスパシアヌスの勝利の主要な要因であったこと、政権樹立後、出自から来る「権威」を有さぬ彼は帝国中央では妥協を強いられることもあったが、治世半ばの改革を経て「フラウィウス派」と呼びうる元老院議員グループの支持を背景に安定を実現でき、それとともに積極的な政策を展開できるようになったことを明らかにした。

第2部第3章では、ウェスパシアヌスの政権獲得の基盤となった帝国東部に関する即位後の政策を検討して、従来の研究が軽視してきた帝国東部再編策の意義を強調するとともに、再編にともなう帝国東部出身者の政権参入の重要性を具体的に明らかにする。さらに本論文最終章の第2部第4章では、ウェスパシアヌス帝の次男でフラウィウス朝第3代皇帝のドミティアヌス（在位81～96年）の元老院議員、とりわけ新興家系出身議員やアドレクティの登用を分析した。そして、帝国東部出身者の採用をはじめとするドミティアヌス帝の人材登用策を革新的と評してきた従来の研究を批判し、それが父帝ウェスパシアヌスの政策の延長上にあったと意義づけ、新しい政治勢力の台頭する真に変革的な時代は、ウェスパシアヌス帝治世に始まることを主張するのである。

以上の第2部における検討を通じて論者は、騎士身分出身のウェスパシアヌスが帝位に就いて積極的な政策をおこなったことにより、帝国中央における政治支配層に変化がもたらされ、紀元2世紀の五賢帝時代に元首政は最盛へと導かれたと結論する。

本論文最後の「むすび」で論者は、元首政の進展の中で、騎士身分が元老院議員身分基軸の体制への人材供給源として大きな意義を有し、かつ近衛長官に代表される騎士身分公職も元首政の基本的構造の補完として整備されてきたのであって、皇帝による元老院議員の掣肘・排除という観点から騎士身分の発展を意義づけることはできないことを確認している。

論文審査の結果の要旨

ローマ帝国は紀元前1世紀の末以降、国家の頂点に元首＝「皇帝」を頂く「元首政」体制をとっていたが、実際に広大な国家の統治を担ったのは、帝国第1身分の元老院議員身分と第2の騎士身分であった。なかでも元老院議員は共和政時代初期以来の政治エリートであり、帝国最盛期の紀元1～2世紀にその定数は600名で、国家統治の要職を独占していた。また、皇帝位にも必ずこの身分の者が就いた。これに対し、第2の騎士身分は人数も多く、元老院議員より下位の公職を担当するとともに、皇帝直属の職務に就くことが多かった。このため、共和政の政治的伝統の担い手として元老院議員を捉え、一方騎士身分を皇帝の「走狗」とみなして対置する見解がかつて学界では一般的であった。ローマ帝国では、紀元3世紀の軍人皇帝時代の危機の中で元老院議員に代わって騎士身分の者が帝国統治の要職に就くようになり、同世紀末には共和政的要素を払拭し皇帝権力が絶対化した「専制君主政」が成立したと一般に説かれるが、先の見解に従えば、紀元1～3世紀の元首政の進展は、皇帝による元老院議員身分の抑圧・排除と皇帝直属の騎士身分の興隆の過程として理解されるのである。

こうした元首政の展開に関する解釈は、元老院議員の政治参加や彼らと皇帝との関係の精査に基づき克服されつつあるが、旧説に代わる政治過程の新しい説明は、政治の表舞台に現れることが多く史料にも恵まれている元老院議員の動向に基づい

てなされることが主流で、第2身分の騎士身分の果たした意義については、統治権力を手にした紀元3世紀を別にすれば、欧米の学界で構成員に関する基礎データの集積が進んでいるものの、政治史の脈略で充分議論されているとはいいがたく、わが国でも、先行研究としては、主として紀元3世紀の騎士身分を扱った論文を数点数えるのみである。本論文は、このような学界の状況を踏まえ、紀元1～2世紀と3世紀の初頭の騎士身分に重大な関心を払いつつ、最盛期ローマ帝国の政治を、それを担った政治支配層の実態や変質を解明しながら明らかにしようとした意欲的研究である。

本論文は2部に分かれ、第1部では騎士身分の発展の典型例として、騎士身分公職体系の頂点に位置した「近衛長官」を論じる。近衛長官は皇帝の警護部隊の長であるが、やがて警護に限らず内政・外交に大きな権力を有するようになり、紀元3世紀には「副皇帝」のごとき存在となつて、皇帝位に就く者まで出現した。従来の研究は、3世紀初頭のセウエルス朝の諸皇帝のもとで、ローマ法学者として著名な人物が近衛長官として活躍したために、この時期に近衛長官の内政面での権限発達が認められると主張した。しかし、論者は、当該時期に近衛長官となつた人物とその権力形態の精査をもとにして、こうした見解が妥当でないことを証明した。さらに、時代を遡って史料の分析と先行研究の吟味をおこない、近衛長官が軍事と内政の両面において恒常的に権限を行使し国政の運営に携わるようになった時期が、皇帝と元老院議員との関係が良好で政治が安定していたことで知られる紀元2世紀中葉の五賢帝時代後期であったことを、権限確立の背景とともに明らかにした。これにより論者は、騎士身分の発展が、元老院議員身分主導の政治体制たる元首政と対立したものではなく、それを補完するものであったと説くのである。

本論文の第2部は、第1部と異なり、騎士身分そのものを検討するのではなく、近衛長官職の権限が確立した時期よりさらに前のフラウィウス朝時代(69～96年)を対象として、元老院議員身分の人材供給源としての騎士身分に注目する。紀元1世紀以降のローマ社会では、元老院議員家系の断絶などが生じ、元老院の定数を満たすために、皇帝による次位の騎士身分からの昇格がおこなわれた。論者は、第2部の諸章において、騎士身分家系出身の元老院議員や、騎士身分から元老院議員身分に中途編入された者(アドレクティ)の実態、彼らと皇帝との関係に注意しながら、当該時代の政治動向を分析する。そもそも皇帝ネロ死後の内乱を勝ち抜いてフラウィウス朝を開いたウェスパシアヌス帝(在位69～79年)自身が、イタリア地方都市の騎士身分家系出身の新人元老院議員であった。皇帝ネロまでの諸皇帝は古くからの貴族家系に属し、ネロ死後の内乱時に乱立した諸皇帝も伝統ある元老院議員家系の出身であったから、騎士身分家系出身のウェスパシアヌスの登位は、元首政史上きわめて意義深い出来事であった。論者は、こうした皇帝の出自に注目して、内乱時におけるその支持基盤と政権獲得後の権力安定化の過程を分析する。そして、帝国東部を基盤としたことがウェスパシアヌスの勝利の主要な要因であったこと、政権樹立後、出自から来る「権威」を有さぬ彼は帝国中央では妥協を強いられることもあったが、治世半ばの改革を経て「フラウィウス派」と呼びうる元老院議員グループの支持を背景に安定を実現でき、積極的な政策を展開できるようになったことを明らかにした。

さらに論者は、ウェスパシアヌスの政権獲得の基盤となつた帝国東部に関する政策を検討して、従来の研究が軽視してきた帝国東部再編策の意義を強調するとともに、再編にともなう帝国東部出身者の政権参入の重要性を具体的に明らかにする。第2部の最終章では、ウェスパシアヌス帝の次男でフラウィウス朝第3代皇帝のドミティアヌス(在位81～96年)の元老院議員、とりわけ新興家系出身議員やアドレクティの登用を分析した。そして、ドミティアヌス帝の人材登用政策を革新的なものと評してきた従来の研究を批判し、それが父帝ウェスパシアヌスの政策の延長上にあつたものと位置づけたのである。以上の第2部における検討を通じて論者は、騎士身分出身のウェスパシアヌスが帝位に就いて積極的な政策をおこなったことにより、新たな政治勢力が台頭して帝国中央における政治支配層に変化がもたらされ、紀元2世紀の五賢帝時代に元首政は最盛へと導かれたと主張する。

最終的な結論として論者は、元首政政治史において、騎士身分は元老院議員身分基軸の体制への人材供給源として大きな意義を有し、かつ近衛長官に代表される騎士身分公職も元首政の基本的構造の補完として整備されたのであって、皇帝による元老院議員の掣肘・排除という観点から騎士身分の発展を意義づけることはできないことを確認しているが、近年の政治過程の新解釈にも合致する妥当な見解と判断される。

本論文が第1部で論じた近衛長官については、その政治的権限の発展に関する厳密な考察が充分なされてきたわけではないが、欧米学界で騎士身分興隆の典型的な例としてしばしば論じられてきた。また、第2部のフラウィウス朝時代政治史については、碑文史料を主材料として元老院議員の出自・経歴など個人データを集積するプロソポグラフィ的研究がおこな

われている。論者はこうした欧米学界の研究成果を渉猟し、しかし個々の論点で先学の見解を史料に照らし合わせながら逐一検証しつつ論を進めている。それは数多く施された注記が示すように、慎重で信頼に足るものである。本論文によって、従来の諸研究や概説書が説いてきた近衛長官やフラウィウス朝時代政治史の説明に、多くの新たな知見と誤りの訂正がもたらされたと思われる。

もともと、本論文にも望まれる点がないわけではない。第2部では、騎士身分そのものの検討ではなく、上位の元老院議員身分への人材供給源としての役割に考察が限定されている。騎士身分公職体系が未確立な時期を扱っているゆえであり、またこうした観点自体重要ではあるけれども、上昇したもと騎士身分の者の考察だけでなく、それと関連させながらこの期の騎士身分自体の実態も解説しておくべきであった。また、論者は個々の論点での先行研究の吟味と自己のオリジナリティーの提示に優れているが、元首政をその担い手である政治支配層の実態と変質から考察するという本来の大問題に対して、「元老院議員身分」ではなく「騎士身分」を主に考察するという独自の観点をとる以上、そうした観点から元首政全体に関わる先行研究の整理と吟味も論文冒頭でより詳細におこなっておけば、本論文全体の独創性が一層はっきりしたのではないかと思われる。ただ、こうした点は論者の今後の作業で近い将来において果たされることが期待できることである。近衛長官についてもフラウィウス朝時代政治史についても研究蓄積を持たないわが国では、論者はまさにパイオニアであり、本論文はわが国ローマ史学界の貴重な財産になると思われる。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1999年2月23日調査員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。